

戦艦大和の歴史

4. 「大和」の最期

昭和20(1945)年4月5日、戦艦「大和」に沖縄海上特攻の命令が下ります。援護する航空機もない中、「大和」と巡洋艦「矢矧」、そして「冬月」など8隻の駆逐艦による第二艦隊約7,200名は、アメリカ軍が上陸した沖縄へと向かうことになります。

4月6日、徳山を出航した「大和」以下第二艦隊は翌7日、九州南西沖の海上において多数のアメリカ軍機の攻撃を受けました。「大和」は応戦しましたが、多数の魚雷、爆弾の命中により、14時23分に沈没しました。

「大和」の乗組員①名、うち生存者は276名。3,056名の尊い命が失われました。



▲沖縄特攻作戦時の第二艦隊航路と「大和」沈没位置



▲攻撃を受ける「大和」

戦艦大和の歴史

進歩のない者は決して勝たない
 負けて目覚めることが最上の道だ
 日本は進歩ということを経んじすぎた
 私的な潔癖や徳義にこだわって、真の進歩を忘れていた
 敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか
 今日覚めずしていつ救われるか
 俺たちはその先導になるのだ
 日本の新生にさきがけて散る
 まさに本望じゃないか

吉田 満『戦艦大和の最期』より

これは、戦艦「大和」副砲射撃指揮官として沖縄特攻作戦に参加し、戦死した臼淵磐大尉の言葉といわれています。

沖縄海上特攻作戦の意義について士官の間で「②で死ぬことに意味があるのか」と大論争になり乱闘まで起こったそうです。



▲臼淵磐大尉

この言葉を聞いた乗組員たちはどう感じたか、想像してみよう。

